アラブ首長国連邦　　派遣期間 2013 年 4 月～2016 年 3 月

ドバイ日本人学校　帰国報告

～多様性を認める社会に学ぶ・国際基準の学校視察を受けて～

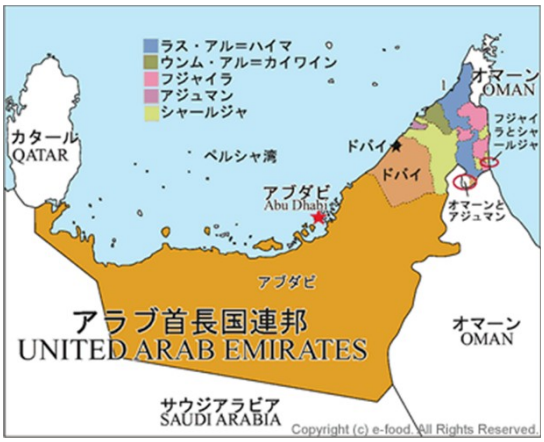
釧路市立美原中学校
教　諭　　飯塚　順也

１　はじめに

中東地域にあるアラブ首長国連邦の一つを構成するドバイ首長国。中東地域と一言でいっても、地理的に広範囲に及び、国や地域によって政治、経済、社会、文化、地勢、歴史的に様々である。しかし、歴史的文化的になじみの少ない中東世界に対しては、その多様性を感じる目が曇っている気がする。メディアから得られる情報がステレオタイプの既成概念となって、中東アラブ世界があたかも紛争地域であったり、イスラム教徒＝テロリストであったりするかのような印象が植えつけられていることも少なくない。アラブ首長国連邦、特にドバイでの生活経験では、中東イメージと現実とのギャップを大きく感じることになった。国際理解に大切な多様性や価値観を認めていく姿の裏には、既成概念を超えて継続的に学んでいく態度が必要であると強く実感した。

２　アラブ首長国連邦とドバイの概要

（１）アラブ首長国連邦



アラブ首長国連邦（United Arab Emirates：略して U.A.E.）はアラビア半島の東部に位置する国で、サウジアラビアやオマーンと国境を接し、アラビア湾[1]、そしてインド洋に面している。面積は約 8 万 3600㎢で北海道とほぼ同じである。

UAE は 7 つの首長国で構成されている。7 つとは、アブダビ、ドバイ、シャルジャ、アジュマーン、ウンム・アル・カイワイン、ラアス・アル・ハイマ、フジャイラであり、最大の面積をもつアブダビに連邦の首都が置かれている。

UAE は連邦の結成が 1971 年と建国から 44 年ほどしかたっていない。国名のとおり、7 つの独立した首長国が連邦を組んでいる体制であるため、各首長国の権限が大きく、連邦政府の権限は比較的小さい。外交、軍事、通貨などについては連邦政府の権限であり、連邦全体の大まかな制度は統一されているが、資源開発、教育、経済政策、治安維持（警察）、社会福祉、インフラ整備などは各首長国の権限となる。同様に、各首長国によって法律やルールが異なっている。大統領はアブダビ首長のナヒヤーン家、副大統領はドバイ首長のマクトゥーム家が世襲により継ぐのが慣例化している。

1　日本で一般的に使う「ペルシャ湾」は、中東アラビア語圏では「アラビア湾」と言っている。

（2）ドバイ首長国

①ドバイの概要

ドバイ首長国はUAEの経済の中心で、アブダビの北西に位置する。金融センターなど経済的な中枢機能が集積しており、中東での影響力が高いグローバル都市である。今世紀に入って多くの超高層ビルや巨大ショッピングモールが建設され、現在でも巨大都市計画が進んでいる。面積は約4000㎢で埼玉県とほぼ同じであり、定住者人口は約250万人である。

2008年に起こった世界金融危機はドバイにも飛び火し、2009年に「ドバイ・ショック」と呼ばれる金融危機へ発展した。しかし、周辺地域が「アラブの春」といわれる情勢不安の状態になる一方でドバイの政治・社会状況は安定しており、多くの投資や観光客が戻ってきた。2020年にはドバイ万博の開催が決まっており、現在はそれに向けた大規模な開発が進められている。

【ドバイの急速な発展　1990年頃（左）と2010年頃（右）の同地点】

②ドバイの経済発展

ドバイというとオイルマネーのイメージがあり、産油国としての印象がとても強い。しかし、歳入のうち、石油・ガス収入はわずか4%であり、国家収入の74%を手数料収入（土地移転・住宅登録や入管、観光、運輸等関連）が占めている（在ドバイ日本国総領事館資料より）。ドバイの発展が油田の発掘とオイルマネーからもたらされたことは事実だが、もともと産出量は中東の他地域やUAEの他首長国に比べて少なく、かねてより埋蔵量も多くないと言われていた。そこで早くから「原油に依存しない国」づくりが進められ、貿易・運輸・製造・建設・金融・観光など幅広い経済部門がドバイを支えている。先見性のあるカリスマリーダーが、空港や港湾、道路など経済活動に不可欠なインフラを整備し、経済特区を設け、行政機能を強化し、外資を誘致した結果が、現在のドバイの発展につながっている。

近年、日本でもドバイは豪華できらびやかな中東の近代都市として認知されており、観光地としても高い人気を誇っている。「世界ナンバー１」をコンセプトにドバイの名前を世界に知らしめ、より斬新なアイディアを打ち出すことによって、新たなヒト・モノ・カネを呼び込もうとしているのである。

【左から、世界一の高層ビル、世界最大の人工島、世界最大のショッピングモール】

③ドバイの治安の良さ

「中東での生活」と聞くと治安の悪さを心配する声が多い。しかし、実際に生活してみると、UAEやドバイは、世界のどこと比較しても安心して住むことのできる場所であった。確かに周辺諸国は紛争や過激テロ組織による活動など危険な場所もある。しかし、同じ「中東」といっても、それぞれの国・地域にはそれぞれの政治経済、社会状況があり、一概にまとめて既成概念やイメージのみでその地域を捉えることはできない。

UAEの治安が良い理由に一つに、国が豊かで国民が裕福に暮らしている点がある。政府は自国民に対する優遇政策を進めており、教育・医療・住宅・土地・仕事などの積極的な支援を行っている。首長をリーダーとして、多くの国民が満足して生活を送っている現状がある。また、UAEに住む人口の８割以上は外国人である。私たちは外国人が多くなると治安が悪化すると考えがちである。しかし、この国では外国人は仕事があってはじめて入国・居住ができるので、社会不安の大きな要因である失業が存在しない。政府は外国人労働者の必要性を認知し、労働条件や医療などの保障を確保してきた。多くの外国人労働者を社会的に受け入れ、国家の発展のために有効に活用しているのである。

【国民から尊敬される首長】

【多くの外国人労働者による都市開発】

④宗教に寛容なイスラムの国

多国籍国家のドバイでは、様々な異文化、宗教、慣習に対して非常に寛容である。ミニスカートの外国人と全身を黒で覆った女性がショッピングモールで買い物を楽しんでいる。白いアラビア装束の男性が息子のクリスマスプレゼントを選んでいる。スターバックスの向かいのモスクからはお祈りの声が響いている。そんな光景がドバイでは当たり前に見られる。

また、ドバイ政府は「Open doors. Open minds. 」の言葉のもとに、異教徒向けにイスラム文化を紹介する活動を積極的に行っている。非イスラムの私たちでもモスク内を見学することが許され、イスラム教の行事や考え方を学ぶ機会が多くあった。「国際性」という言葉が多く用いられる現在において、ここドバイでは、その言葉の本当の意味を日常的に感じることができた。

【ショッピングモールの巨大クリスマスツリー】　　【非ムスリム向けモスク見学のツアー】

⑤イスラム教

異なる宗教に寛容なドバイとはいえ、イスラム教を国教とする国は、政治や日常の慣習すべてにおいてイスラム教が基本となっている。これは、宗教に疎かったり、政教分離の原則であったりする日本とは大きく異なることである。

ドバイの日常生活は、基本的に太陽暦や西暦が使われるが、宗教的な行事や祭日はイスラム暦が採用されている。イスラム暦はヒジュラ暦とも呼ばれ、1年は354日。太陽暦とは1年で11日ずつずれていくことになる。ラマダン月に行う断食も、比較的涼しい冬期にある場合もあれば、気温50度近い酷暑にあたることもある。また、イスラム教は、合同礼拝日が金曜日であるため、金曜日と土曜日が休日となり、1週間は日曜日からスタートする。日本人学校も現地日本企業もこの社会ではイスラムの慣例に沿って生活している。

【イスラム教の五行（ムスリムに義務として課せられた行為）】

信仰告白（シャハーダ）	「アッラーの他に神は無い。ムハンマドは神の使徒である」と証言すること
礼拝（サラー）	夜明け、正午、午後、日没、夜半と1日5回の礼拝を行うこと
喜捨（ザカート）	収入の一部を困窮者に施すこと
断食（サウム）	イスラム暦第9月のラマダン月に、夜明けから日没まで一切の食物並びに水を口にしないこと
巡礼（ハッジ）	イスラム暦第12月の巡礼月に(定められた方法で)メッカへ巡礼すること。

イスラム教の教えで有名なことの一つに、豚肉を食べることを禁止していることがある。確か　にムスリムは豚肉を食べないが、他の宗教に寛容なドバイでは豚肉を食べたり、アルコールを飲んだりする場所や機会が保障されている。

また、ラマダンは断食の行為ではなく、実施する暦を表したものである。日中に飲食をしない行為は辛いと想像していたが、当のムスリムたちや街のようすからは、イベントの雰囲気が沸き上がり、むしろ楽しさを感じているようだった。感謝や思いやりの気持ちが大切にされ、家族の絆が深まったりチャリティ活動が盛んに行われたりしていた。（右下の写真は、ラマダン期間中に私設テントで外国人労働者に食事を提供し、「喜捨」の行為を示している。）

多くのムスリムは真面目で穏やかに生活している。「ムスリム＝過激派」というような短絡的なイメージを持つことは許されない。私たちは、宗教的な慣習を知るときに、禁止事項などの行為自体に注目しがちである。行為の基盤になっている考え方や人々の思いを知ることこそが意義あることだと感じた。異なる宗教に対して理解を示していく姿は、これから国際社会に生きるたくさんの日本人にとって大切なことだと感じている。

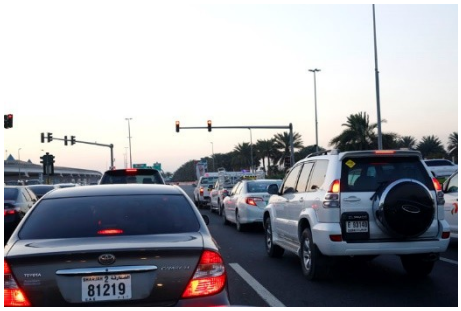
【非ムスリム用の豚肉コーナー】　【ラマダン期間中に無償提供される食事】

⑥日本との関係

近年、ドバイと日本とのつながりはますます深くなっている。ドバイの在留邦人数は約 2600 人(2013 年現在)であり、中東・アフリカ地域で最大の日本人コミュニティーを擁している。ドバイはその地理的利点と経済特区の利便性から、日本からも様々な業種の企業が進出している。

ドバイの日本からの主な輸入品は、自動車、一般機械、電気機械である。2005 年から 2010 年までの 6 年間における自動車輸入相手国 1 位が日本であり、そのシェアは 44%と高い。日本の自動車や工業製品の人気が高く、親日的な地域である。日本人であるとわかると、笑顔になったり、親切心が増したりする場面が数多くあった。これまで日本企業や日本人が、誠実に海外の人と接し、懸命に努力しながら外国と付き合ってきた成果である。それらに感謝すると共に、日本人としての誇りを大切にしていこうと感じた。

多国籍民族のドバイにおいて日本からの影響力は大きいものではないが、ドバイのインフラ整備に貢献している高い技術力と工業製品、日本食やお菓子などの嗜好品、美容関係品、漫画やアニメなど、日本文化への興味の高さは多分に感じられる。



【人気の高い日本のアニメイベント】　【町中に走る自動車の多くが日本車】

3　ドバイ日本人学校について

（1）ドバイ日本人学校の概要

ドバイ教育局に認可されて「日本国総領事館付属の私立学校」として現在に至る。本校は平成 27 年度に開校 35 周年を迎えた。学校教育目標に「自主性、自立性、国際性」を掲げ、日本の学習指導要領に基づいた教育課程の編成を行っている。さらに、全学年で英会話を週に 2 時間、アラビア語を週に 1 時間行っている。また、総合的な学習の一環として現地理解を積極的に推進し、体験活動や現地校との交流活動、課題追究学習の充実を推進している。また、運動会や音楽発表会、演劇発表等の行事も重要な活動として捉え、教育活動を展開している。

（2）児童生徒の現状

本校に在籍している児童生徒は、日本国籍を有する子であり、その多くが日本の学校への入学を希望している。平成28年2月27日現在では134名が在籍している。児童生徒の大多数は日本企業の駐在員の子女であるため、1年～3年程度で帰国または他校に転校し、長期的に在籍する場合は少ない。①確かな学力を身につけ、円滑に日本の学校へ適応すること。②在外の利点を生かし、英会話力を向上させること。児童生徒や保護者の願いは大きく上記2点に集約できる。

（3）派遣教員としての思い

在外教育施設に派遣された以上、学校目標の具現化や授業や生活指導を通して職責を果たそうとするのは当然である。そして、「児童生徒が安全に楽しく過ごせる学校」、「保護者や関係機関から信頼される魅力ある学校」、「教職員自らが胸を張って誇れる学校」づくりをしたいという希望を持っている。

以下の表は、ドバイ総領事館（ドバイ及び北部首長国）管轄の子女数（学齢期）の数である。ドバイ在住の子女のうち日本人学校に通う児童生徒は、小学部では36%、中学部では22%となっている。ドバイ周辺に生活する在留邦人が「通わせたい学校」をつくるには、学校全体の改善点を共有・協働して学校づくりを行っていくことが大切である。

【ドバイ総領事館管轄（学齢期）子女数】

小学部				中学部				小･中学部
日本人学校	補習授業校	その他	合計	日本人学校	補習授業校	その他	合計	総計
98	0	176	274	30	0	106	136	410

外務省　海外在留邦人子女数統計（長期滞在者）（平成27年4月15日現在）

（4）三大行事

学校行事を通して仲間と共に成長する経験は、他のインターナショナル校には無い魅力の一つであるといえる。ドバイ日本人学校では「一生懸命がかっこいい」をキャッチフレーズに、学期に1回ずつ計3回の全校児童生徒が参加する行事を大切にしている。

①「つながり合う」音楽発表会

毎年6月に低学年、中学年、高学年、中学部の4部構成で発表会を行っている。それぞれの発達段階に合わせて合奏・合唱指導を行い、この行事を通して音楽的情操を養い、学級学年づくりを行っている。児童生徒は発表会に向けて目標を持ち、一生懸命に音楽的活動に取り組むまた、日本の歌や楽曲を通して、児童生徒や参加者が日本文化に触れる重要な機会となっている。

②「かかわり合う」熱沙祭

毎年10月に低学年、中学年、高学年、中学部の4部に分かれて演劇発表を行っている。音楽発表会で培った「つながり合い」を進化・統合し、それぞれの発達段階に応じた題材を選び、台本を作成し、配役や小道具・大道具を決定する。児童生徒の達成感が得られ、保護者からの評価も高い行事である。

③「みがき合う」運動会

1年間の集大成として毎年1月に日本人会との共催で運動会を行っている。小学1年生から中学3年生までの縦割りチームを編成し、中学2年生のリーダー中心に自分たちでチーム運営を

行う。上学年の生徒は低学年生徒のお世話をしながら、一生懸命にダンスや競技の練習に打ち込む。当日は本気の戦いを繰り広げ、笑いあり、涙ありの、児童生徒にとっては思い出深い運

動会になっている。

【『ふるさと』を全校合唱】　【演劇の発表】　【高層ビルを見上げて運動会】

（５）現地校との交流

現地理解教育を推進するために現地校（ローカル校）との交流を年４回行っている。学年ごとに訪問校を決定し、一緒に学習やスポーツをしたり、互いの文化を交流したりするなど有意義な体験活動をしている。日常から学習しているアラビア語を実際に使う良い機会にもなっている。交流を通して、意思を伝えるためには言語だけでなく、伝えようとする気持ちや非言語コミュニケーションの大切さも実感することができた。

４　教育実践について　～学校外部評価（School Inspection）への取り組み～

（１）学校外部評価（School Inspection）とは

ドバイでは、「Knowledge and Human Development Authority（以下、『KHDA』として表記）」が教育行政を管轄している。その組織によって設立されたドバイ学校視察部局「Dubai School Inspection Bureau（以下、『DSIB』として表記）」による学校視察が、ドバイに登録しているプライベートスクールの全学校を対象に、毎年一度（視察期間は３日間）実施される。視察団は欧米の様々な教育専門家が招集され構成されている。毎年、評価を受けた後に各学校は改善計画（アクションプラン）を作成し、提出することになっており、継続的な改善努力を必要とされる。また、評価や具体的なレポートは KHDA の HP や新聞等で公開され、学校のレベルとして一般に周知される。また、評価によっては学校運営を優遇したり、制限を与えたりする大きな影響力をもっている。

ドバイの国家戦略の一つである教育改革の試みは、私たちにとっても世界標準から学校の教育活動を見直す機会である。この外部評価を有効に活用することで、グローバルな観点から学校経営の向上を目指すことができる。

（２）ドバイ日本人学校の評価

前述の DSIB による視察においては、本校の総合的な教育水準は Good[2]と評価を受けている。こ

2　評価は、Outstanding、Good、Acceptable、Unsatisfactory の４段階。2015 年度から５段階に細分化された。

れは2008年度以来、毎年受けている評価でもある。学校の総合的な教育の質を評価するにあたって、DSIBは学校の実績と基準を6つの視点から検証した。

1	生徒の5つの主要教科における習得度および成長、彼らの学問への取り組み
2	生徒の個人的／社会的発達度
3	学校全体での教育指導がいかに効果的に行われているか
4	教育課程が全生徒の教育的需要と合致しているか
5	学校が生徒たちを保護・支援出来ているか
6	学校の統率力と管理能力（学校運営、人員調達、施設管理、資産調達を含む）

視察結果は視察団によって収集された数々の情報（教室での生徒観察、学習内容の確認、生徒たちとの対話、職員・保護者・運営管理者との面談、保護者・教員に対して行ったアンケート結果）をもとに導き出された。

視察団が説明した、ドバイ日本人学校の「強み」と「改善点」は以下のようになっている。

［ 強み ］

・指導言語（日本語）の習得度、発展は非常に高いレベルにある。

・全学年における理科、および中等部における数学の習得度および成長は非常に高いレベルにある。

・全校における生徒の姿勢および態度は非常に高いレベルにある。

・全職員、生徒、保護者、学校および更に広いコミュニティー間で非常に強い関係性が見られ、協力し合う家族的精神が感じられる。

・全生徒への質の良い指導が学校運営者および職員の尽力によって実現されている。

［ 改善点 ］

・特別支援が必要な生徒が全授業において成果を得られるよう、特別に支援するための訓練された専門の職員を任命すること。

・KHDAによって規定されている要件を満たすよう、現状不足しているアラビア語の授業時間を増やす。また、イスラム教育の指導および教育課程水準を確実に順守すること。

・自己評価の枠組みを作り、いつまでに何を行うかを明確にすることで、改善計画を強化すること。

・校内における健康・安全対策が、KHDAの規定を全て満たすよう、安全対策を強化すること。

（3）外部評価に関わる考察

①ドバイにある在外教育施設

アラビア語の授業増とイスラム教育の充実は、視察毎に改善の要求を受けている。日本の学習指導要領の上では時数の確保が難しく、また、宗教的中立（宗教教育を行わない）という立場では、KDHDの規定を遵守することができないという理由である。一方で、ドバイ政府が認可した学校であるという以上、要求を完全に無視することも許されない。これが在外教育施設の特質であり、教育課程の一層の工夫が望まれる点である。

②DSIBと本校の2つの学校自己評価

DSIB の視察前に、規定の様式の自己評価（self-evaluation）を提出しなければならない。この項目は前述 6 つの視点をより細分化し、それぞれ 5 つ程度のチェック項目となっている。視察官は見取りやインタビューを通して内容を評価基準表と照合させる。その際、視察官は「自己評価で判断した根拠を示してください」と常に質問してきた。その際に求められることは、客観的な数値である。自己評価の根拠をしっかりと示すことができる客観的な資料を用いる必要がある。

一方で、本校独自に進めてきた自己評価は、各種アンケートと国内的なテスト（NRT や定期テスト・単元テスト）中心の数値となっている。これだけでは DSIB の自己評価には対応できない。当然ではあるが、生徒の学習達成度を示すには、「国際数学・理科教育調査（TIMSS）」や「OECD 生徒の学習到達度調査（PISA）」などの国際的調査の指標の利用価値が高い。

以上のように、DSIB の自己評価と本校の自己評価は大きく相違がある。DISB のより客観的な自己評価のシステムは、世界標準のＰＤＣＡサイクルの観点から学ぶべきことが多い。本校の自己評価は、学校教育全般の改善箇所をチェックすると共に、保護者との信頼関係を構築していく性格を持っている。2 つの自己評価の内容を合一するというより、お互いの良さを生かした自己評価の実施を考えることが効果的である。

③環境整備と安全管理

治安の良いドバイとはいえ、在外教育施設であり、児童生徒の安全を最優先に考えなければならない。また、充実した教育環境を整えることも必要不可欠である。防犯・遊具・施設・薬品・衛生管理・日よけ、校庭の状況・ICT・図書室や理科室の整備など、DSIB の指摘は細かすぎる面もある一方で、海外ならではの発想や気付きで、私たちも納得できることが多い。

④個に応じた指導（特別支援教育・クリティカルシンキング）

DSIB からは特別支援教育の充実と専門的な指導、クリティカルシンキングを育成する授業の助言があった。分野が異なるが総じていえば、どちらも個に応じて成長や向上を支援する授業者としての重要なポイントである。

⑤自信をもって進めていく実践

日本人学校として日本の教育について自信をもって推進していくことが望まれる。レベルの高い数学や理科教育、日本文化の尊重と国際理解の態度、保護者や生徒と教師の良好な関係、他者への礼儀や敬愛の態度、芸術教育など、高評価を得た要素も多い。学校教育は他校と競合するものではなく、しっかりと足下を見つめ、目的達成のために確実に丁寧に実践していくことが求められる。

【視察団との集合写真】

【保護者へのインタビュー】

【日本の学校文化として清掃活動を視察】

【Inspection Report として視察結果が発表される】

５　おわりに

ドバイの急進的な教育改革はめざましく、教育委員会制度のない在外教育施設にありながらも、本校はドバイ政府機関の多くの認可や指示を受けることが日常的になっている。そのような中で、12 月に実施される DSIB の視察は、私たちにとって大きな負担でありプレッシャーとなっている。事前から準備や対応に追われ多忙である。視察が終わった今、多少、この制度自体の面白さを感じることがある。そして、その一部の仕組みや世界標準の考え方を、日本での学校評価に生かすことができないだろうかと考える。

学校長というリーダーを中心に、派遣された教員や現地採用の教職員一人ひとりが、「海外で暮らす子どものために」という同じ視点をもって行動していくことが、在外教育施設である日本人学校には重要であることを強く感じた。また、学校に対する保護者からの信頼感と高い家庭教育力は、児童生徒の心の安定と学力の向上にとって必要不可欠な条件である。そのためには、保護者や児童生徒のニーズを的確に把握し、質の高い授業の展開、児童生徒自身が自己の成長を実感できる教育をしていかなくてはならない。つまり、私たちには質の高い教育集団になるための自己啓発と組織改革が常に求められているのである。

3 年間のドバイでの日々を健康かつ有意義に過ごすことができた。また、イスラムの理解について充実した学びをすることができた。ドバイには多彩かつ多様な民族、文化、習慣が平和に共存し、異文化のモザイク社会を形成していた。この社会は、「自分たちはイスラム教徒として信じる生き方をす

るが、同時にそうでない人たちの生き方も尊重する。また、世界のいろいろな文化や習慣にふれて、いいと思うものは自分たちの生活に取り入れる。」という印象が強い。その発想の柔軟さと合理性は私たちが考える「国際性」を身につけるための大きな手がかりになると考える。今後、ドバイでの 3 年間の経験で学び得たことを、今後の教育活動に生かして努力していきたいと思う。